

湖沼地帯の北岸に四八津路があり、その辺に漁村があつたとすれば、この歌は正しく解釈出来るのではあるまいか。四極山の方は多分三河方面のことであらう。

「もとつひと」考

板橋 倫行

本つ人ほととぎすをや希らしみ今や汝が来る恋ひつつ居れば
(巻十、一九六二)

先の太上天皇の御製の霍公鳥の歌一首

ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人かけつつもとな吾を哭し泣く
も(巻廿、四四三七)

万葉集中に「もとつひと」(本人、母等都比等)といふ語は二箇所しか出てゐないが、いづれの場合も「ほととぎす」にからんでゐる。どういふ訳で「もとつひと」と「ほととぎす」が形影相伴ふのか、それはちよつと解きかねる問題である。

ここで在来の解釈がどういふ方向をとつてゐたかをのぞいて見る――

略解は一九六二の「もとつひと」に対して

ほととぎすをさしてもとつ人と言へり。集中遠つ人雁がきなむと詠める遠つ人は、雁を言へるにひとし

と「もとつひと」を「ほととぎす」の代換詞と見做してゐるが、なぜさうなるのかは、遠つ人の例証をもつてしても説明不足である。

宣長が「昔のなじみの杜宇よ」と解してゐるのを千蔭は引用してゐるが、これが略解立言の根拠となつたのであらう。

万葉辞典は「もとつひと」を「いにしへびと」「ふるなじみ」と解き、巻十のは霍公鳥を親しんで呼んだのであると細説を加へてゐる。千蔭と宣長両者の説から筋を引くものといへよう。

ところが四四三七の「もとつひと」に対しては、千蔭は契沖に従つて

もとつ人は既に神ざりまし、元明天皇などの御事にやといひ、さきに「ほととぎすをさしてもとつ人と言へり。集中遠つ人雁がきなむと詠める遠つ人は、雁を言へるにひとし」といつたのはきれいに忘れて、遠つ人とともに擬人化された「鳥」であつたはずの「もとつひと」はここに至つて完全な「人」にまで格上げされる結果となつた。

「ほととぎす」と「もとつひと」とは、何か不可分からみ合ひながら、その結合の理由の解釈が十分についてゐない、そこからかういふ解釈上の不統一、場当たり主義が生じたものと思はれる。元來ほととぎすといふ鳥名の由つて生れたところは、その啼声に基くもので、つまり擬声語である。ほととぎすの啼声が「ほととぎす」と聞き做されてゐたことは巻十八の

曉に名乗り鳴くなるほととぎす

いやめづらしく思ほゆるかも(四〇八四)

の同伴家持の歌がこれを証する。この啼声から鳥名の生じたことは高田与清(擁書漫筆)内田清之助(日本の小鳥)などで承認されてゐるが、彌富破摩雄氏も万葉集續攷(郭公・杜鵑攷)において

即ち杜鵑の字は、支那人の擬声音で、「ホトトギス」は我が國

人の擬声音、其の何れにしても鳴く声に擬して宛てられた擬声音であるところとは同じである。
と説かれてゐる。

私は「ほととぎす」が擬声語であることを承認するとともに、「もとつひと」もまたほととぎすの啼声の擬声音であることをここに主張したのである。

現今ほととぎすの擬声は全地域的に多種多様であるが、「てつぺんかけたか」が標準語的(?)にゆき亘つてゐるやうである。ときとして「ほんぞんかけたか」がその啼音を忠実に表現してゐると信じてゐる地方もある。

信州出身の友人に聞いたところでは、信州ではほととぎすは「なんか めつけたか」と啼くさうである。

また「おとと恋しや ほととぎた」と啼くと信じてゐる人たちもある。何でも兄が誤つて弟を殺し、ほととぎすと化して「弟恋しや」と啼くといふのである(日本民俗学辞典補遺ホトトギスの条) 一体ほととぎすの啼声は何音節として日本人に受取られてゐるか——もし、ほととぎすといふ鳥名が擬声語であり、「もとつひと」が擬声音であるなら、ともに五音節である。

しかるに後代の日本人はほととぎすの擬声音を六音節ぐらゐに聞き做してゐる。「てつぺんかけたか」の「てつ」と「ぺん」を各一音節と見做せば六音節である。「ほんぞんかけたか」についても、「ほん」「ぞん」をそれぞれ一音節とすれば、やはり六音節とならう。「なんか めつけたか」も六音節として処理出来る。

ところが「おとと恋しや ほととぎた」に至つては七音節と五音節の複合体である。

ほととぎすの啼き方について寺田寅彦博士が浅間山麓の星野温泉でゆきとどいた観察をして置いて下さつたので、この場合非常に参考になる——

その啼声は自分の経験した場合には所謂「テツペンカケタカ」を三度位繰返すが通例であつた。(中略) 時には三声のうちの終の一つ又二つを「テツペンカケタ」で止めて最後の「カ」を略することがあり、それから又単に「カケタカ、カケタカ」と二度だけ繰返すこともある。(疑問と空想、螢光板・寺田寅彦全集第五卷所載)

寺田さんによると

Ⓐ 6—6—6音節

が通例で、その他時として

Ⓑ 6—6—5音節

または

Ⓒ 6—5—5音節

の啼声もあり、また単に

Ⓓ 4—4音節

の場合もあると、非常に細かに聞き分けられてゐる。

「ほととぎす」や「もとつひと」などは五音節部分の啼き方を擬声化したものと考へられるし、「てつぺんかけたか」「ほんぞんかけたか」「なんかめつけたか」などは各六音節部分を採上げて言語化した結果と見てよからう。

「おとと恋しや ほととぎた」に至つては七音節と五音節の複合体で、七音節のものは寺田博士の観察からもれてゐるが、時としてこの種の啼き方も存在するのであらうか。

ことにこの擬声中興味深いのは五音節の部分の「ほとつきた」である。といふのは私が万葉人のほととぎすの擬声音と推定する「もとつひと」の名残りがここに留まつてゐると思へるからである。

今、「もとつひと」と「ほとつきた」とをローマ字で並べて書つて見る——

MOTOTUHITO
BOTOTUKITA

頭音のMがBに移り、第四音節のH(P)がKに変り、第五音節の母音OがAに動いてゐるだけで、ほとんど同一の音を持続してゐるのを發見する。

「もとつひと」を万葉人のほととぎすの擬声音とする私の主張は、「ほとつきた」といふ今尙生きてゐる擬声音の存在によつて裏書きされたわけである。

さて「もとつひと」がほととぎすの啼声の擬声となると、一九六二、四四三七の兩首において従来とは異つた解釈が生じて來るのは当然である。

一九六二の「本つ人ほととぎすをや希らしみの「本つ人」と「ほととぎす」との結びきは、「もとつひとと啼くほととぎす」となつて、「本つ人」は一種の冠詞の如きものとならう。

四四三七の「本つ人かけつともとな」の「本つ人かけつつ」は、ほととぎすが「もとつひと」と鳴きつづけての意となる。この場合の「かけ」は「口にかけていふ」義で、鳥の啼くことに用ゐた類例として

むらさきの根延ふ横野の春野には

君をかけつづつ鶯鳴くも(卷十、一八二五)

が挙げられよう。

従來の解釈ではこの「かけ」を「心にかける」「しのぶ」といふ風に見て、作者が本つ人——故人、昔なじみ、いにしへびと等——を想ふこととなした。しかしさうすると、「吾を哭し泣くも」——私を音に泣かせることゝの主体が何であるかさつぱり判らなくなる。

新考が二、三の句の間に「汝が声をあげて啼いて」といふことを加へて聞く必要を説いたのも、この窮地を脱しようとするためであつた。

しかし私解のやうに、「もとつひと」をほととぎすの擬声と見て、ほととぎすが「もとつひと」と啼きつづけて、私を泣かせることと見らば、新考の想定した挿入句はさらにその必要のないことが明らかにならう。

ほととぎすの啼声が「もとつひと」と万葉人に聞き取られたとすると、それによつて始めて解ける万葉歌の問題が一、二ある——

卷二、吉野宮に幸のあつた時の弓削王と額田王との唱和

古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴きわたり行く(一一)

(一)

古に恋ふる鳥はほととぎすけだしや鳴きし吾が念へる如(一一)

(一一)

において、何故にほととぎすが「古に恋ふる鳥」もしくは「古に恋ふる鳥」であるかの問題である。

郭公が古を思つて鳴くとは漢土の古來の伝承で、その思想がわが國に伝はつたのであらうといふ解釈も行はれてゐるやうである。

しかしこれも「もとつひと」——故つ人——とほととぎすが鳴くと万葉人が信じてゐたとすれば、ほととぎすが古を恋ふる鳥と考へ

られるのは極めて自然であらう。

次に巻十の

大和には啼きてか来らむほととぎす汝が鳴く毎に亡き人念ほゆ

(一九五六)

に見える「亡き人」とほととぎすの聯想も、ここから解けよう。

「もとつひと」といふ啼き声が「故つ人」——それは時として「亡き人」でもあらう——を偲ばせるのである。

(1) 「大事典」ほととぎすの条下に藤沢衛彦氏は一通り各地の聞き方をまとめてゐる。

(2) 北陸地方での「ほつちよかけた おとつとこひし」の例から見ると、「おととこひし」といふ六音節が本来の擬声的なもので、「や」は伝承的に添加されたのではなからうか。

(3) 「もとつひと」「ほととぎた」を「ほととぎす」と並べてローマ字化してみる。

HOTOTOGISU
MOTOTUHITO
BOTOTUKITA

三者ほぼ同一音とらつてゐるから接近してゐるのが見出されよう。

(4) 「君をかけつ」の「君」はうぐひすの擬音である。これは機を見て論じた。

追記 この旧稿を補訂浄書したのち、たまたま武田博士の全註釈十五をひもどいた。すると、巻廿、四四三七の語釈におつて、「カケ

ツツは口に懸けて。霍公鳥の啼き声が、モトツヒトと聞えるので、もとつ人を口にかけてと歌つてゐる」とあり、それにつづいて巻十、一九六二の「本つ人霍公鳥をや」の歌も、鳴声によつて本つ人と冠してゐると述べられてゐる。(全註釈九の巻十、一九六二の解では未だ本つ人を鳴声とする説を説いてはゐない)
博士が私の擬音説と同一の見地に到達してゐるのに一驚した次第であつた。(一九・二・二二)

『爾比多夜麻』歌異説

——地誌的考証による一つの試論として——

尾 関 栄 一 郎

爾比多夜麻 彌爾波都可奈那 和爾余曾利 波之奈流兒良師

安夜爾可奈思母

新田山嶺には著かなな吾によりそり間なる兒らしあやに愛しも
(三四〇八)

右の上野国歌の爾比多夜麻は新田山であり、『和名抄』所載の上野国新田郡新田郷(註)「爾布太」にある山で、現在の群馬県太田市の方にある金山(標高二二・八メートル)の丘陵をいふことは、既に定説化してゐる。この根拠を成したものは『古義』が『此新田山は、外の大山とはつづかずして、孤立の山なるべし、さらば他の嶺